
暗い十字架

策夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗い十字架

【Nコード】

N4066V

【作者名】

策夜

【あらすじ】

「あー、うん、よくあるよね、こういうテンプレ転生二次小説」

好きな作品を混ぜて、暗い性格の主人公を自分の気の向くままに書いてみたら、こうなりました。

あれー、おかしいなあ…。

暗い性格で、最初から最強チートな主人公です。苦手な人は読まないこと！

完全趣味の自己満足小説！しかも初書きなので残念クオリティー！

プロローグ 神との遭遇（前書き）

最初は暗い世界観で、しばらくするとなのはたちが登場します。
T I S T Aは輪郭と名前だけ。設定もすぐになくなりますので、知
らなくても大丈夫です。

プロローグ 神との遭遇

ばちんっ、と音を立ててスイッチが入った。そう表現するしかないほど、唐突に意識が覚醒した。

眠りから醒めるときの覚醒とも違うし、ぼんやりしていたわけでもない。

訝しく思いながら、眼を開く。

「んー…え、と？」

目の前にドアップのおじいさんの顔。白い髪をめちゃくちゃ長く伸ばしているのは辛うじて分かるけれど、近すぎてどう反応すればいいのかわからない。

「おお、目覚めたか。よもや失敗してしもうたかと冷や冷やしたわい」

私が戸惑っていると、おじいさんはさっと離れていった。なんにしても、あんなに顔を近づけていた意味はわからないけれど。

気になることは他にもある。

なんだろう、なんだか、とても大切なことを忘れてしまっているかのような、世界とズレてしまったかのような違和感。

「誰？」

離れて、全身を見ると、そのおじいさんはやたら神々しい。

白い衣服をゆったりと身に纏い、杖まで突いている様は、まるで――

――

「そう。ワシは神じゃ」

ひょっひょっひょっ、と笑いながら声を掛けられて、私は思わずフリーズ。

今、この人、私の心を読んだ？

「うむ。ここは、死と生の狭間。そして、あらゆる世界の狭間じゃ」
軽く頷きながら、勝手に話を進めていく自称神様なおじいさん。

「自称とはなんじゃ、正真正銘神様じゃぞ」

「……」

信じがたい。

しかし、このおじいさんがさつきから私の心を読んでいることは確かかなようだし、何より、こんなだだっ広い真っ白な空間が地球上のどこかに存在してたまるか。

目覚めたばかりで気にしていなかったが、よく見ると床も壁も天井も見当たらない。足が地に着いている感触もない。目に入るのは、ただひたすらに白い空間と、おじいさんだけ。

信じないことに根拠は無いけれど、信じるに足るだけの実感がここにはある。

「うんうん。理解が早くて助かるわい。しかし、お主、冷静じゃのう」

どういうことだ。

「——お主、死んだんじゃよ」

「……ああ」

そういう、ことか。

違和感の正体がわかった。そうか、私は死んだのか。

思わず、笑みがこぼれる。生きていたときには浮かべなかった、喜びの笑顔。

「……やっと、死ねたんだ」

良かった。やっと解放された。あの狭くて苦しい世界から。

恐らくはショックで一時的に失っていたのであろう記憶が蘇る。

私の今までの人生。そして、死ぬ瞬間の記憶。

父さんを病気で喪って、母さんが壊れて私を憎んで、親戚をたらい回しにされ、学校ごとに苛められて、邪険にされて、捨てられて、売られて、買われて。それに逆らうだけの気力もなく。誰にも必要とされなかった自分。26歳だなんて、結構長生きしたものだ。最期にも、見捨てられて、そのおかげで死ねた。確かに怖かったけれど、今は安堵の方が大きい。

そうか。やっと死ねたのか。

半透明で不安定な自分の手のひらを眺めて、死んだことをかみ締めて、私は晴れやかな気分で顔を上げた。

「じゃ、私はどうすればいいのかな。やっぱり、地獄行き？」

そこには、なんとも言えない表情をした神様がいた。悲しそうな、苦しそうな、怒っているような、そんな、複雑な表情。

地獄に落とすことを躊躇っているのかな。優しいな、神様。でも、きつと前よりマシだから、私は平気だよ。痛みも、悲しみも、苦しみも、大丈夫。私にはもう何も届かないから、生きているときより楽かもしれない。

「どうしたの、神様？」

ずつとずつと、私は祈ってきたでしょう？

早く、早く、私を殺してくださいって。お願いしますって。

きつと、神様が私なんかの為に何かをしてくれることはないって分かってたけど、それでも私は祈っていたでしょう。

ああ、もしかして、祈りは届いていたのかな。だから、私は死ねたのかな。

「…死んだことをそんな風に喜ぶ子は初めてじゃよ」

普通は、もつと苦悩するものだ。受け入れるまで、時間もかかるものじゃ。と、物憂げに語る神様。

「どうして？私は死にたかった。そして、今、こうして死んでいる。もう、誰かに迷惑をかけなくてもいいし、誰かに傷つけられることも、傷つけてしまうことも無い」

誰にとつても、最善。一番良い終わり。

精神科に通うのもそろそろ嫌になってきていたし、誰に求められてもないのに、正常になるなんて無意味だし。もともと壊れていたんだから、もう、いいよね。

「お主の死は、ワシの手によるものじゃ。本来、神が個人のために手を下すことは許されておらん」

だから、代償を払わなくてはならない。

神様は、重々しく私に告げる。

なんなんだろう。

いいよ。なんでもする。神様のおかげで死ねたんだというのなら、私はお礼をしよう。そのために、もう一度同じ人生を、とかでもいい。終わりがあることが分かっている今なら、前よりは全然楽し。
「…別の世界に、転生してもらおう」

「……………はい？」

それはちよつと、予想外だったかな…。

「過酷な人生じゃ。戦って、戦って、それで報われるのかどうか。しかし、だからこそ」

「私みたいな、壊れてしまった人間が丁度いい？」

「…うむ。言い方はあれじゃが、それもある」

ふうん。率直だね。まあ、私はこれ以上壊れようも無いしね。

「お主には、様々な能力を与える。お主には、半神になってもらう」
…ええつと？

神様の話をまとめると、

？半神になる

？超能力・異能が使えるようになる

？いろいろな世界を放浪することになる

えつと、つまり。

「それって、かなりのチートなんじゃ」

ずっと昔に何かで見た転生小説のテンプレってやつなのかな。

あ、目を逸らした。

自覚があるんだな、この神様。

「名前や容姿は、こちらで勝手に決めさせてもらう。まあ、成長するのを楽しみにするのじゃ」

「はあい」

素直に返事をする、にこやかに微笑んできた。

ちっちゃい頃に遊んでくれた父さんに、少し似てる。

「ある意味では、お主の父になるのかもしれないのう」

ひよっひよっひよっ、と本当に楽しそうに笑うから、少し顔が熱くなった。

「では、行ってくれ」

私のすぐ近くの空間が渦巻く。これに飛び込めってことなんだろうな。

私は、その空間に手をかけると、神様を振り向いた。

「ばいばい。…父さん」

神様の心底虚を突かれた表情に満足して、私は思い切って渦巻きに飛び込んだ。

どんな世界のどんな人間になるのだろう。ちよっとは、楽しみかな。

ぶっつん、と意識が途切れた。

「父、か…」

神はぼそりと呟いた。

その表情は、嬉しいような、切ないような、複雑な表情だった。

「…願わくは、その魂が救われんことを。…我が娘よ」

第一話 転生

「ばー」

いえーい。なんだかんだと転生しました。

母親のお腹の中から意識があるので、すごい退屈だった。

今も、赤ン坊なんで退屈さ加減では良い勝負なんだけどね。何もできないから。

やつぱりというか、当然というか、家庭環境は悪い。怒鳴りあいの喧嘩しかない両親。酒とタバコの臭いが充満した家。できるだけ息を潜めて生きているけれど、このままだと動けるようになる前に死ぬと思う。

でも、まあ、一応、私も半分とはいえ神様だし。簡単に死にはしないだろうけど。

名前はあるらしいよ。

テイスタ。それが私の名前。

苗字はわかんない。覚える必要もなさそうだし。まあ、いつか。

〜2年後〜

時間をだいぶぶつとばして、テイスタ2歳。

両親には殴られ蹴られ、ろくに食事も与えられず、会話もせず。

まあ、知識とか、能力とか、無駄なくらいあるので何にも困らないんだけど。

生まれてこの方、ろくに声を出した事がない。

立派に虐待児やってます。

抵抗とか、やろうと思えばできるけど、目立つのは避けたいので、大人しくしてる。でも、同じ年の子と比べるとかなり小さいし、瘦

せすぎてる。

「はっ…はっ…」

そんなわけで、私は近所でも問題の子供として、マークされている。

今も、とある所からパンを盗んで逃げている所だ。

身体能力が半端ではないので、つかまった事はない。

「待て、こらー！」

「っ…」

目の前に現れた腕を、ひょいっと避けて私は走る。ボロボロの服を着た私は、どっかのストリートチルドレンに見えるんだろうな。

薄汚れてるせいで、いまいち自分の容姿がわかんないところが最近の悩みだ。

裏通りを適当に走り回って、私は追っ手を撒いたことを確認して家に入った。

「…！…！」

なんだろう。家の中から、変な物音がする。誰かいる。

今日は、両親ともいる日で、物が壊れたりする音や、怒鳴り声なんて無いほうがおかしいくらいなんだけど。なんか、今日はおかしい。

部屋を覗いたとたん、私の中の感情が爆ぜて消えた。

血まみれの部屋。

人間の壊れる音。

鬼のような形相の見知らぬ誰か。

私の両親は、誰とも知らぬ男に、めった刺しにされていた。

ああ、私が捨てられるより先にあの人たちが殺されたのか。これは、ちよつと、予想外だったかな。

男が去った後で、両親だったものを前に、自分の感覚が麻痺するのを待った。死体について何も感じなくなるまで、10時間。

私は、誰かが部屋に入ってきて、私に話しかけてきたのをぼんやりと認識するともなくしながら、意識を手放した。

私は、修道院に引き取られた。カワイソウな、孤児の私。

両親を殺したのは、ジャンキーの男で、20ドルのために、両親は殺されたらしい。安い命。まあ、私なんかを産んだ人たちだし、驚きはしない。

「ここが、今日から貴女のお家ですよ、テイスタ」

「…あ」

使ったことのない声帯は、酷く掠れた音しか出さない。

それを聞いた院長先生は、悲しそうに微笑んで、私の頭を撫でた。どうやら、キリスト教のようだ。細かいことは知らないし、教えられもしないけれど、まあ、一応ニューヨークに住むことになった。年老いた、優しい院長先生。黒人でアフロの助祭様。時折訪れる神父様。そして、定期健診でお世話になる医者。後は、私と同じように哀れみの対象である、カワイソウな子供たち。

一週間も経てば、修道院の本は読み尽くし、神様の教えについて院長先生と話せるほど詳しくなった。

二週間も経てば、私の身体能力に気づいた子供たちが曲芸をねだってくるようになった。彼らを喜ばせるために、私は手品や軽業をたくさん覚えた。

三週間で、近所の図書館の本は読み尽くし、ほとんどの国の言語や歴史なんかも覚えた。広範囲な知識を得た私は、専門的な大人にも負けない自信がある。

一ヶ月も経てば、何もすることがなくなって、本格的に超能力や異能の練習に手を出した。幸い、知識だけは先に豊富に頭に入れたので、手当たり次第に試してみた。ほとんどのことは出来た。もちろん、みんなにバレないように隠れてやった。

半年が経つと、本気で何もすることがなくなった私は、修道院にあった楽器を弾いてみた。うん、少し弄ってみれば構造も理解でき

たし、難しい曲も弾けた。ちなみに、歌については、讃美歌などでみんなの絶賛を頂いた。ハスキーなアルトで、癖の強い声だけど、それがイイらしい。

一年が経ち、私は3歳になった。

まだ、3歳なのか。としみじみ感慨に耽る。

前世の記憶もあるせいで、精神年齢は30歳近い。そのせいで、なんだかやたら密度の濃い3年間だ。この一年の密度は、前世の全てもよりも濃かったと思う。

大人顔負けの知識と能力を持ち、無表情で淡々とした3歳児。そんな私は、修道院内でも、近所でも、ちよつとした恐怖の対象となっていた。

まあ、半分神様なのだから、しょうがない。

ちなみに、今の私は、灰銀色のツンツン髪をウルフカット、アイスブルーの瞳は常に半眼、しかも無表情という、非常に可愛くない、生意気な男の子という風情だ。

神様が創ってくれただけあって、非常に整った、奇麗な顔立ちだが、どうも男にしか見えない。男装したら似合いそうだな。

「やあっと見つけた、ティスタ」

「シャロン」

木陰でぼけーっとしていると、私とは全く正反対の女の子が声を掛けてきた。同い年の少女で、金髪碧眼、ハツラツとした、可愛い子だ。

とっつきにくい私に何かと構ってくれる。

「…どうした」

「院長先生が探してたよ。お話があるんだって」

「話…？」

なんだろう。

「そう。行つて来るよ」

軽く反動をつけて、一挙動で立ち上がった私は、シャロンに背を向けて教会へ向けて歩き出した。

ふと、後ろからの視線を感じて、後ろで手を振る。

「ありがと、シャロン」

「あ——うん！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4066v/>

暗い十字架

2011年9月14日03時32分発行